

『THIS IS 読売』原稿

1993.3

天皇と民主主義(仮)

橋爪大三郎

天皇は、日本にしかない。

天皇は、血統によってその地位を継承する、王権の一種であるけれども、どうもふつうの王権と違っている。

どこが違っているかというと、三点ほど考えられる。

第一に、万世一系(皇統連綿)と称して、切れ目なく続いていること。

第二に、天皇という、皇帝とも何ともつかない奇妙な名前を持っていること。

第三に、ごく最近まで、人間なのか神なのかよくわからない存在(現人神)だったこと。

これらを順に考えていこう。

まず、万世一系だが、西欧の王様でも中国の皇帝でも、王朝というものがあって、ときどき血統が途絶えてしまう。そうすると、つぎの王様が選ばれ、別の新しい王朝(家系)が始まることになる。こういうことがしばしば起こるものなのだが、天皇の場合には一度もなかった。

これは不思議なこと、よほど、天皇を存続させたいという社会的な力が働いていたに違いない。ひとつは、天皇に誰でも(と言つと言いすぎだが、なんと

く血が繋がっていけば)なれること。

もうひとつは、天皇家を断絶させても、誰も得をしないこと。この二つの条件があつて、天皇は永続しえた。

これは、日本人の王様に対する考え方がきわめて特殊であることをあらわしている。

天皇とは何か。古事記、日本書紀などによれば、神の子孫だという。だから偉い。だがそこには、日本人はみな神の子孫だとも書いてあり、天皇とふつうの人民は血のつながった親戚ということになる。しかも、日本人は死んだら神になると思っているから、神/天皇/人民のあいだに、はっきり線が引けない。(これに対してヨーロッパのGODは、日本の神と大変違っている。そもそもGODを「神」と訳したのが誤りの元だった。)

こういう天皇を戴くことで、日本人は自分たちが日本人であることを確認しているのである。外国では、異民族が攻めてきて王様になるということがよくあるが、日本人はそういう経験が全然ない。二番目に、天皇という名前。もとはスメラミコトという名前だったのが、いつから天皇になったのか。

天皇は、中国を意識した名前。中国には皇帝がいて、周辺の王たちを家来にして世界を支配している。中国から見れば天皇は、そんな王の一人だが、日本人は

奇妙な名前をつけて、あたかも皇帝と対等である、みたいと思うことにした。そして、奈良や京都といった中国都市のミニチュアを作り、律令や仏教など中国の制度・文物を輸入した。

それでは完全に中国風になったかという、そうではなく、いつの間にか日本風に変質してしまう。そして明治になると、今度はヨーロッパの真似を始めた。天皇はエンペラーだ、ということになってしまった。

西欧には立憲君主というものがある。天皇もそれにならおうというわけで、洋服に着かえたり、軍隊を作ったり、かつて中国を真似たように、せっせと外国を模倣した。そういう旗振り役を、古来天皇家は担うことになっている。今日で言えば、広告代理店の電通・博報堂といった役回りである。

外国に優れたものがあつた場合、それをコピーして、何としても日本の文化水準をそこまで引き上げる。そういう運動のリーダーとして、人民の文化的生活に責任を持っているのが天皇なのだ。

三番目の、天皇が神みみたいな存在でもあるというのは、西欧化(文明開化)の動きにパンチを利かせるため、明治政府の元老たちが考えた宣伝文句だった。天皇が中国の皇帝みたいな政治権力者でなくて、おまじないみたいなことをやって

いる原始的な性格を残していたのも、ちようどよかった。こういう、二千年も昔の土着の王権が、だから現代社会にまで生きのびているというのも、世界的に見て珍しい。

*

つぎに、民主主義とは何かについて、おさらいしておこう。

新憲法の柱は、言うまでもなく民主主義。民主主義と言ってもいろいろあるけれど、ここではもちろん近代デモクラシーという意味である。

民主主義とは何か? ズバリこれは、「法の支配」の特別な場合である。

そこでまず、法の支配について説明すると、専制政治や単なる共同体と違って、人間と人間の関係を法によってコントロールしようという考え方だ。人びとの間にトラブルが生じたら、必ず法に照らして解決する。これが法の支配で、人間よりも法が上にあるわけだ。

(図・法の支配)

法の支配は、近代社会を作るのに絶対必要な工夫である。このことによって、市民一人ひとりが自由と、権利と、財産の保障をうる。近代的な市民として、安心してふるまうことができるわけだ。つぎに民主主義が、ただの法の支配と

どう違うかというと、この法そのものを自分たちで作りに出すところが違う。自分たちで作った法でなければ、法とは認めないのである。法の支配を受けている党の市民たちが、その法を作り変えるというコントロールの手段を持っている。そのループが完成したとき、民主主義も完成する。

(図・民主主義)

法を作り出すところは議会だから、民主主義にとってまず議会は不可欠。法を生み出すのが、議会の最も大切な活動である。

法にもいろいろあるが、なかでも、政治制度全体の枠組みを決める法、すなわち憲法がいちばん大切である。その憲法のなかに天皇が位置づいているのが、日本国憲法の特徴だ。

*

問題は、民主主義をこのように考えるなら、それは天皇となんの関係もないことである。実際、天皇のない民主主義は世界中にいっぱいある。いや、逆に言うべきで、天皇のある民主主義は日本にしかないのである。どうして、何の関係もないはずの天皇と民主主義が、セットになっているのか。読者のみなさんは、ここをどう考えますか？

結論を言うと、民主主義にとっていはんの問題は、正統性。そもそも、この民主主義というシステムは、どうして存在するようになったのか。どうしてほかの制度でなく、この制度がスタートしたのだろう。

この始まり方には、二つしかない。

ひとつは、ある日突然始まった、というスタートの仕方。憲法そのものはただの字を書いた紙切れにすぎないが、それを民衆が、自分たちの憲法にしようと言いはじめ、実際にそうしてしまった。これは、革命と呼ばれる。

革命そのものは、法の支配でも、もちろん民主主義でもない。血が流れるかどうかは別として、とにかく暴力的なものだ。それによって民主主義が支えられるというのは、パラドックスだが、まあやむをえない。

つぎに、もうひとつの可能性は、伝統によってスタートするケース。伝統と民主主義もやはり無関係なのだが、やむをえない。

民主主義でない政治の伝統と言えば、まず王権である。王様が人民を支配していたんだけど、いつの間にか、王制の反対物である民主主義に移行してしまった。奇妙なことだが、実際にそういうことがありうるのだ。

イギリスの例で考えてみると、王のほ

かに貴族がいた。貴族には貴族の都合があるので、王をコントロールしようとする。一人ではやられてしまうので、束になって議会を作る。そうしているうち、議会のルールや法律ができあがる。その結果、王が偉いのか、それとも法律のほうに権威があるのかもめることになるが、とうとう、法律のほうが権威があるのでも王に法に従え、となった時点で、法の支配が確立する。さらに、王が立法権を取り上げられ、拒否権もなくなって、議会がつくった法律は全部認めなければならなくなる。こうなれば、立憲君主制とか、民主主義とか呼んでもいいだろう。イギリスはこんな具合に、何百年もかかって民主主義への道を歩んだ。

日本の民主主義は、よく考えてみると第二のケース。伝統による民主主義の正統化、といったやり方だと言える。

日本は一度も革命がなかった。現在の新憲法は、旧憲法の改正で出来あがっているし、旧憲法は、専制君主(憲法なしの支配者)だった明治天皇が、人民のためにプレゼントしたというかたちを取っている。そして、その天皇は、大昔から日本の支配者だったというのだから、どう考えても、大昔から続いている伝統的な権威が憲法を作り出した、というかたちはなっている。これで、正統性の説明は一応つくので、いまの憲法を否定する

立場のひとはごくわずかだ。

*

日本の憲法は、伝統によって正統化されている。ゆえに、日本の民主主義は、本場のイギリスとそっくりでめでたしめでたし。ということになるかというと、そうはならない。

昭和天皇は、英国王室を手本とし、自分も立憲君主としてふるまおうと努力した。けれども、根本的なところで、英国王室と民主主義の関わりと、天皇制と民主主義の関係は違っている。

天皇制の伝統をどうひっくり返してみても、民主主義は出てこない。その理由は、イギリスの民主主義の出発点を考え直してみればわかるはずだ。

イギリスで、王制から民主主義が生まれた理由は、第一に、国王が政治権力を握っていたこと。第二に、その権力を封じこめるために、貴族や市民が議会で同盟したこと。これが、決定的である。

日本で、天皇は、政治の実権を持っていなかった。つぎに日本の貴族は、天皇の取り巻きのことで、天皇に対抗する能力も必要なかった。だから、イギリスで国王を押さえ込んだような力学は、まったく働かない。

ではどうことが起こったかという、政治の実権を独占していた武士が、内輪もめを起こし、改革派の武士が天皇

を担ぎ出した、ということにすぎない。これがいわゆる明治維新。天皇は最初から、政治力学の埒外にあった。そして天皇が担ぎ出された理由は、明治維新を、伝統にもとづく権威あるもののように見せかけることにあった。

明治維新は一種の革命である。しかし表面上は、王政復古というかたちをとった。王政復古とは、もともとの支配者である天皇に、政権を返すという意味。そんな回りくどいことをしたのは、そのほうがうまく行くという、当時の事情による。

いっぽう戦後民主主義とは言えば、それはアメリカの占領をきっかけにしている。占領の結果、天皇の統治権よりも、もう一段高いGHQの権力が生まれた。こんなことを旧憲法は想定していない。戦前以来の天皇制は、ここでいったん断絶したとも考えられる。しかし、表面上は日本政府が存続し、旧憲法を改正するという手続きを踏むなどして、連続性のほうが強調された。天皇はその地位を失わなかった。

実態が大改革であるのに、表面的には連続しているのが、明治維新と戦後民主主義の共通点である。そのどちらの場合にも、世の中を根本的にひっくり返してこれまでと無関係に新しい秩序を作りあげるよりも、それまでの秩序が連続して

いるとみんなに思わせたほうがうまく行く」と判断した人びとがいたのだ。

この連続性を演出したのが、天皇である。大きな変化をカヴァーするために、天皇は便利な接着剤である。万世一系とは、こうしたことの積み重ねにはかならない。

そこで、万世一系をいま風に解釈してみると、「日本人の多くが持っている、日本社会の永続性に対する信念」とでも言えるかと思う。社会は不断に変化していて、多くの亀裂や断絶に見舞われるものだが、日本人はそのことを認めたくない。社会は今ままでおり順調に発展していき、今後もしままで幸福が永続するはずだと考えたがる。

これが中国人であれば、固定した制度をこしらえる。それが律令制だったり、官僚機構だったり、法律だったりする。でも、かたちのある制度を作ると、いつかは壊れてしまう。断絶が起こる。

日本人の場合、そういう固定した制度をつくることを、最初からあきらめている。それが諸行無常だ。権力者たちまでも無常感にとらわれているから、わざわざ打倒する必要がない。つぎの世代の人びとが力をたくわえていけば、すんなり交替が実現してしまう。春が夏になるように、徳川の世が明治になり、戦後民主主義になる。

こういう具合なので、天皇が律令制下の君主であろうと、室町時代のように貧乏で即位の儀礼ができなろうと、江戸時代のように御所に押し込められていようと、明治になって表舞台に出てくようと、日本人の国家の永続性に対する信念には変わりがない。

そうすると、天皇は特定の制度なのかということになる。天皇が政治制度の一部を構成すれば、国家機関なのは当たり前である。でも、そういう当たり前のことを言っただけで、国賊扱いされる場合もあった。多くの日本人にとって、天皇がどういう制度の一部なのかはどうでもいいのである。単なる国家機関や制度を越えた、それ以上のものであるとどこかで考えたがってきた。

*
では、天皇は何をしてきたのか。

産業との関連で考えてみよう。いろいろ説があるが、天皇は最初、稲作が日本に伝わってきた当時の豪族のひとつであったと考えられる。そして、農業祭祀を行ないつつ、農民たちを支配していた。

もし天皇がこれだけの存在であれば、農業の衰退・滅亡とともに、天皇も没落せざるをえないはずである。しかし、明治維新・文明開化以降、天皇はますます力を伸ばしていった。天皇にとっては、農業も工業も、同じなのである。

したがって、製造業が基幹産業でなくなり、脱工業化、情報化の時代を迎えても、天皇が日本人にとって意味を持たなくなるとは限らない。メディアは天皇や皇室の動静を、毎日毎日報道している。人びとは、それに関心を持ち続ける。こうして拡大再生産されていく情報のなかで、天皇は生き延びていく。

天皇の実態とは、なにか特別の活動なのではなく、天皇が存在しているということの情報効果なのである。これが「象徴」ということの意味だ。天皇は、何か特別の活動をしなくてもかまわない。日本人は、曖昧な自分たちのアイデンティティを確認するために、「天皇」という名前を欲しているのだ、と私は思う。

考えてみれば、象徴の機能とは、アイデンティティ(同一性)を確認することだ。

国家は、目に視えない。目に視えないから、なにか目に視えるもので確認する必要がある。アメリカなら星条旗。紋章でもホワイトハウスでもいいはずだけれど、携帯に便利で安いので、星条旗が一番である。

アメリカ人が考えたのは、この星条旗にあたるものを、日本人に作ってやろうということだった。天皇を、憲法のなかで、そう位置づけることにした。

しかし天皇は、星条旗と違って、物で

はない。生身の人間である。天皇の、一個の人間としてのあり方と、アメリカが単純に考えた戦後民主主義の象徴としてのあり方とは、時に矛盾をひきおこす。特に日本人が、天皇のなかに自分たちの日常を超えたものをすべて見ようとする

からなおさらだ。たとえば、結婚問題。ふつうの家庭と違っていたいろいろな矛盾を抱えて、いちばん大変なのが天皇家だなあ、と思っている国民も多いはずだ。

天皇に、われわれ普通人を超えたものを見ようとする、日本人のアイデンティティの確認の仕方は、日本人にコンプレックスがあればあるほど、大きくふくれあがる。もともと中国に対するコンプレックスがあったから、天皇を必要以上に立派な、中国的君主だと考えたがった。今度はヨーロッパに対するコンプレックスが、天皇を必要以上に立派なヨーロッパ的君主だと考えたがった。こういう強がりが、戦前の天皇制だった。

こういう強がりが、天皇を人間と神の中間に位置付けた。天皇をそうやって祀り上げること、日本人はどうにか心理的に安定することができた。これは困った傾向だと、アメリカは思った。アメリカ人は天皇が「神であり人間である」などと聞くと、反射的にイエス・キリストを思い浮かべてしまう。そこで、この軍国主義の温床を断ち切るには、天皇の神

性を否定することだと、天皇の人間宣言をさせたのである。

このように、日本人の誤解を解いてやるうとしたアメリカ人の考え方こそ、誤解に基づいたものではなかったか。

日本人が天皇を「現人神」と呼んだのは、決してキリスト教的な文脈ではなかった。だから天皇が象徴（ただの人間）であるとはわかったとしても、事情によっては、また人間を超えた何者かと思われるてしまう可能性が十分にある。

*

日本人は、「象徴」ということの意味を、やはりよくわかっていないのだ。

たとえば、天皇が外国で「元首」としての待遇を受ける。すると、「天皇は日本の支配者ではないし、国家元首でもなくて、ただの象徴なのだから、それはおかしい」という投書が新聞に載ったりする。けれども外交慣例から考えて、天皇が「元首」なのは当たり前。支配者であろうとなかろうと、政治権力があろうとなかろうと、ある国家を代表する人格のことを「元首」という。象徴である天皇は、まさに「元首」以外の何者でもないのである。

象徴とは、一国を代表し、日本国憲法の定めにしたがって行動する一個の人格（国家機関）、という意味だ。しかし多くの日本人は、そういうふう

に冷静に天皇をみることはできない。日本国憲法の内容を承知しながら、どこか人間を超えた存在とみてしまう。その理由は、われわれが民主主義（新憲法）を自分で選択したわけではなかったことと関係がある。

民主主義は、人びとが主権者の自覚を持ち、契約（憲法）をとり結ぶところに成立する。しかし戦後民主主義は、比喩的に言えば、天皇が民主主義に「改宗」することで始まった。日本国民は、それにつられて民主主義者となったにすぎない。それは、天皇が「文明開化」主義に改宗したので明治維新が始まったのと、同じ構造である。日本人は、自分の頭で考えて体制を選択する代わりに、いつも天皇の真似をしてすませる癖がついている。先ほど「日本社会の永続性に対する信頼」とのべたのは、言いかえればこういうことである。日本人が理解する「象徴」とは、こういった思考の簡略化装置（集合的無責任）のことなのだ。

このような天皇を象徴として抱えこんだ日本の民主主義が、十分に機能するはずがないのは明らかだ。「自粛」のような、欧米では考えられない現象が起きるのも、日本の特徴である。日本の民主主義が少しおかしいという点については、アメリカもヨーロッパもとくに気が付いている。

天皇も、自分たちとまったく同じ人間である。ただ天皇という職務を担っているだけだ。——こう冷静で現実的に考えることができるかどうかで、日本の民主主義の成熟の度合いを測ることができよう。日本社会の国際化は、日本人の天皇に対する態度のなかにこそ、その鍵があるのだ。

「さ でない

（はしづめ だいさぶろう・東京工業大学助教授・社会学）